

文理科学科通信

京都府立福知山高等学校

成長の実感、感動の体感

研究交流会で得た充実感

5月9日、土曜講座を利用して、「みらい学 研究交流会」を実施しました。先月11日の特別講義で4つの研究テーマを提示していただいた、神戸大学大学院農学研究科教授 土佐 幸雄 氏をお招きし、それぞれのグループが制作したポスターをもとに、研究発表を実施しました。

ポスターセッションは、国際学会でも主流であり、発表する側と聞く側の一体感を共有できる特徴があります。今回は、初めての経験であると同時に、学校行事や暦の関係で、限られた時間の中でポスターと発表内容を完成させるにはどのような工夫が必要か考え、自分を一歩成長させるために必要なことを自覚し、グループの4人で集中し、連携し、協力する



ことからすべてが始まりました。前日、研究交流会開始前には、「質問されたらどうしよう…」という心配の声や、1人15分の発表を2回担当する間に、「あまり多くの人に、聞かれると緊張してしまつよ…」といった不安の声が、いろいろな場面で聞かれました。



ンの実例紹介がありました。その後、張り詰めた空気の中で、セッション開始の時間を迎えました。発表者、聞き手の生徒、参観いただいた保護者の方がそれぞれ、関心あるテーマのポスター前に集まりました。「今から、発表を始めます…」その一声から、場内の雰囲気は一変しました。

発表の途中にも鋭く切れ込む聞き手の質問。これが、発表者と聞き手の議論のキヤッチボールを創り出し、発表の盛り上がりを感じ始めたようでした。それは同時に、質問を受けることへの心配が、質問に応えることへの自信に生まれ変わった瞬間でした。聞き手も発表者として、発表者も聞き手の一人として深まる議論、双方の納得は、大きな一体感を作りながら発表を進行させました。

自信と説得力に満ちた力強い発表には、聞き手を引き寄せる力がありました。その一方で、熱心に発表にうなずいていた聞き手がその場を立ち去ると、何故だかつらい気分になり、勇気を出して、「自分の発表を聞いてください！」と、呼びかける発表者もあり、その呼びかけに比べ、聞き手が増える、自信が一層大きくなるようでした。



今回の研究交流会を通して、発表には、内容はもとより、聞き手を引き付けるエネルギーが必要で、そのためには、自分を変えるエネルギーが必要なのも感じました。それは、今の不安から先の不安を予想する自分から、今得た自信からみらいの自信を創り出す新たな自分を見つめる成長と充実感に満ちた機会となりました。

なお、この取組の様子が毎日新聞及びFMキャッスルの取材を受けました。

(成和中学校出身)

先生は「10調べて1話せ」という言葉を言っておられたが、まさにそのとおりだと感じた。質問に対して答えるというところにも言えるが、たくさんの方の話を聞いておくことで、自信が生まれ、スムーズに話すというところにもつながっていくと思う。初めてのポスターセッションは苦労や失敗の連続だったがこれらは次の機会に活かしたい。

(南陵中学校出身)

ポスターだけでなく発表の仕方にも工夫が必要だなと感じました。話し手の人は調べたことを詳しく理解しておかないと、質問に答えられなくなってしまうとわかりました。あと、ただ原稿を読むだけでは相手に伝わらないので、もっと自分の言葉で説明をつけたりしながら発表すればいいとわかりました。

